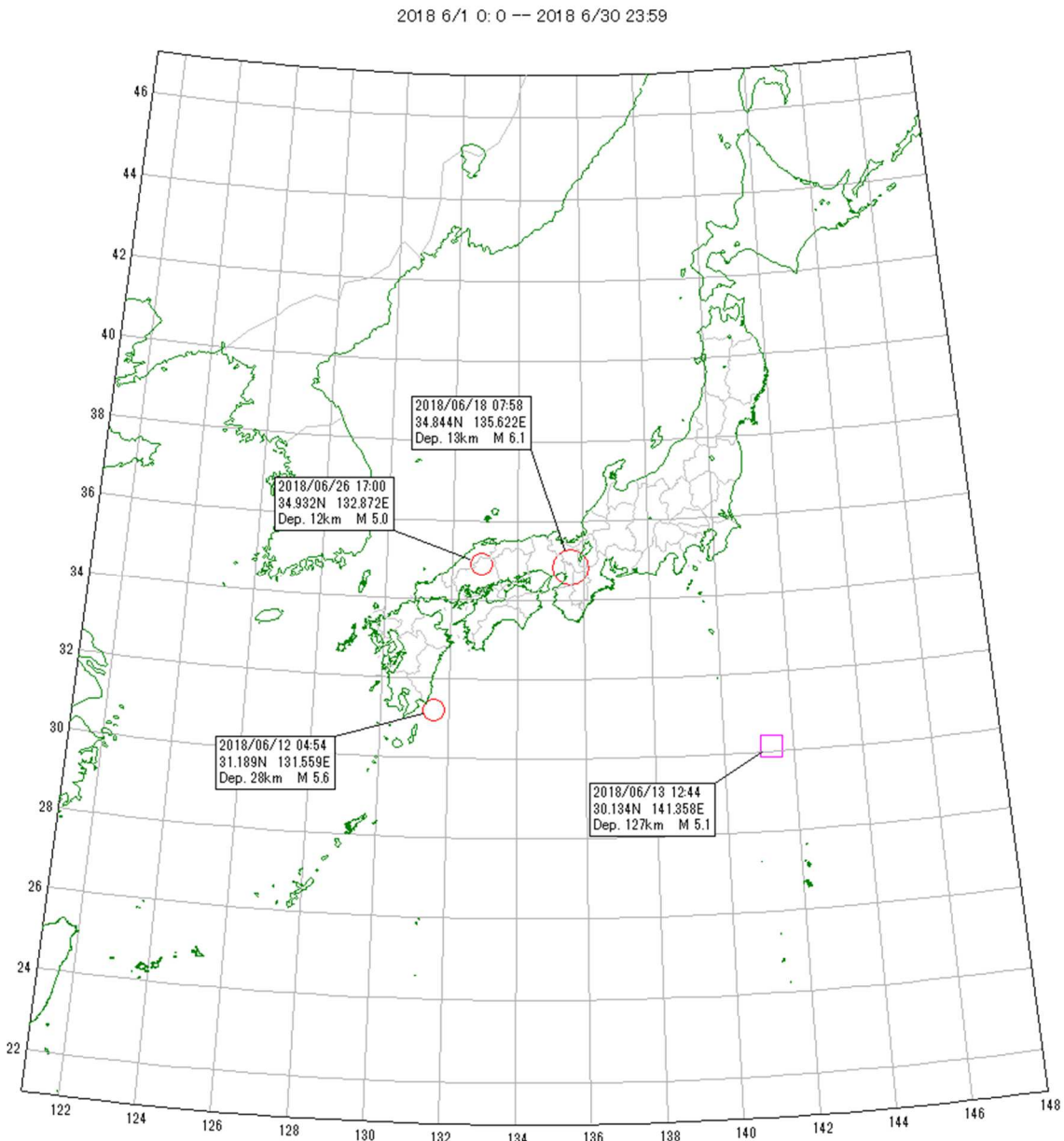


2018年6月の地震活動

6月は6月18日に大阪北部地震(M=6.1)が発生したため、地震活動が活発であったと思われる方も多いかと思えます。ところが日本列島全体で見ても、実は極めて地震活動が低調な一ヶ月であったのです。

下の図は6月一ヶ月間に発生したマグニチュード5以上、深さ200kmまでの地震をすべて図示してあります。6月にはこの領域で4個の地震が発生しました。

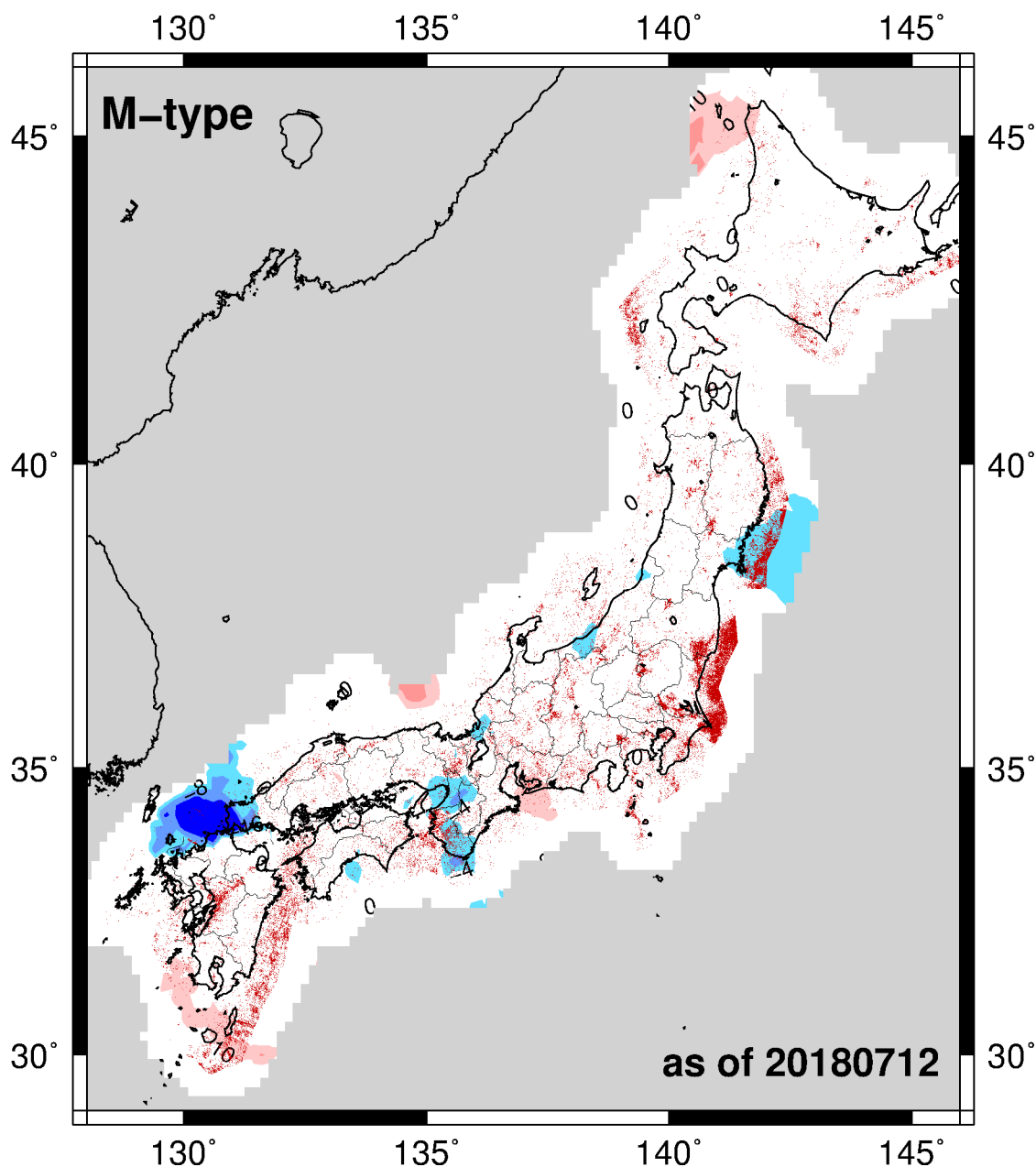


同じ条件でマグニチュード5以上の地震発生数を数えてみますと、2018年1月は7個、2月は21個(台湾でM6.7の地震が発生したため)、3月7個、4月8個、5月8個となっており、6月の4個というのは、かなり少ない発生数であったと言えるのです。さらに大阪北部地震は余震の発生も少なく、その意味でも珍しい地震と言えると思います。



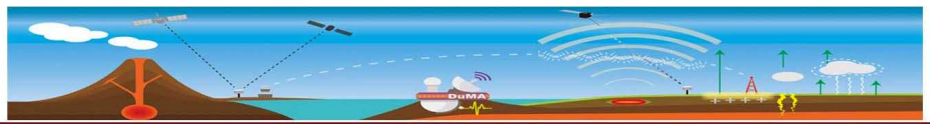
日本列島陸域の地下天気図®

6月18日の大阪北部地震の今後が危惧されますが、地下天気図解析では、近畿地方にまだ静穏化の異常が残っている状況です。下の地下天気図は東日本大震災以降の比較的短い期間の地震データ(約7年間)を使い、さらに陸域に特化して小さなマグニチュードの地震まで用いて解析しています。そのため、海域に出現している異常については、精度が相対的に低くなっていると考えています。

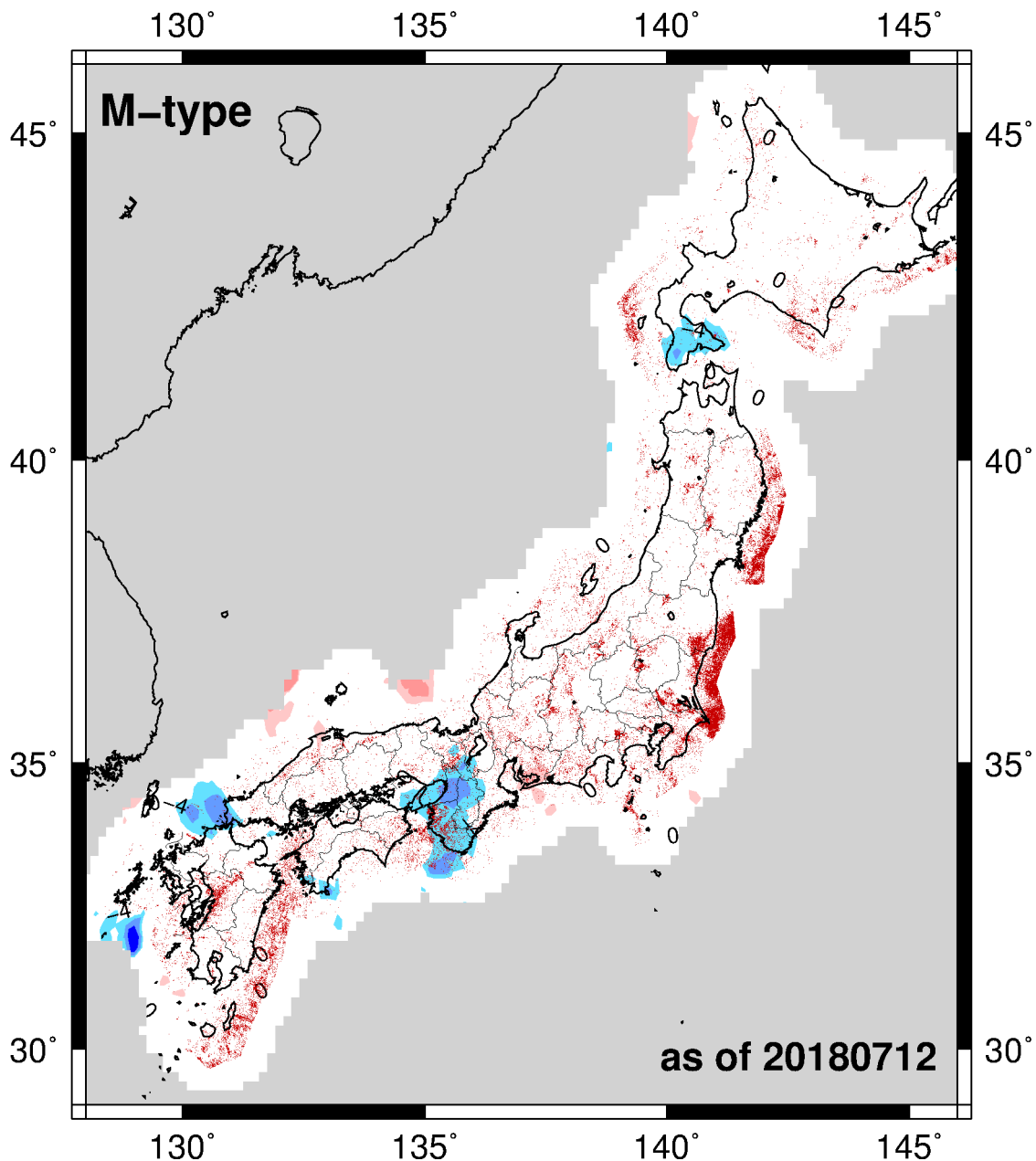


マグニチュード1.5以上の地震を解析に使用。海域での精度は若干低いと考えられる。

次のページに示します地下天気図は、解析対象とする地震のマグニチュードの大きさを2以上に変更したものです。異常が本物であれば、解析対象とするマグニチュードを変更しても、原理的に異常のパターンは変わらないはずです(自己相似性と言います)。この結果、やはり近畿圏と九州北方の異常は本物の可能性が高いと考えています。特に九州北部は、地震学における他の



解析（b値解析というものです）でも、地震発生の可能性が高いという状況証拠があり、特に福岡県を中心とした地域で、今後被害地震が発生する可能性は他の地域と比べて大きいと考えています。



解析に使用する地震の大きさの下限(一番小さい地震)をマグニチュード2.0としたもの。

近畿地方と九州北方地域の異常は共通してみられる。